#### 再考・1771 年明和大津波の遡上高Ⅱ – 先島諸島全域 –

後藤 和久\*・宮澤啓太郎\*\*・安谷屋 昭\*\*\*・垣花 昇一\*\*\*\*・久貝 弥嗣\*\*\*\*\* 島袋 綾野\*\*\*\*\*\*・島袋 永夫\*\*\*・正木 譲\*\*\*・松島 昭司\*\*\*,宮城 邦昌\*\*\*

#### 1. はじめに

沖縄県の先島諸島(図1,宮古-八重山諸島) を1771年4月24日(明和8年3月10日午 前8時ごろ)に襲った津波(以下,明和大津 波)の遡上高は,豊富に存在する古文書記録 や伝承に基づき推定されてきた。明和大津波 の近代的な研究の発端は、岩崎卓爾氏による 『大波之時各村之形行書』の再発見である(岩 崎、1927)。その後、八重山諸島での津波被 害実態は、古文書や伝承に基づき牧野(1968、 1981) により詳細にまとめられた。さらに、 島袋 (1982, 2008) や河名 (2000), Goto et al. (2010) などは、牧野 (1968, 1981) や 『大波之時各村之形行書』の読み下しをまと めた石垣市史叢書(石垣市総務部市史編集室, 1998),そして独自の聞き取り調査結果をも とに,八重山諸島各地の痕跡(御嶽,井戸, 民家,考古学的・地質学的痕跡など)を特定 し、明和大津波の遡上高を推定している。一 方, 宮古諸島についても, 『御問合書』にま とめられた記述(島尻, 1988;加藤, 1989) や地元に伝わる伝承(加藤・大山、1987; 中田, 1990; Nakata and Kawana, 1995; 河名, 2000)に基づいて、各地の遡上高が推定され ている。

古文書記録から推定した歴史津波の遡上高

- \*千葉工業大学惑星探査研究センター \*\*東北大学大学院工学研究科附属災害 制御研究センター \*\*\*無所属 \*\*\*\*多良間村ふるさと民俗学習館
- \*\*\*\*\*\*宮古島市総合博物館(現:宮古島市生 涯学習振興課)
- \*\*\*\*\*\*石垣市立八重山博物館

は、防災上の基礎資料となるだけでなく、波 源を精度よく推定する上でも極めて重要であ る。実際に、明和大津波を対象として各種波 源が推定されてきたが(今村、1931;日吉 ら、1986;Nakata and Kawana, 1995;今村ら、 2001;Nakamura, 2006, 2009; Miyazawa et al., 2012),波源推定は歴史記録から推定した遡 上高に大きく依存しており、随時更新される 遡上高とともに波源モデルも変化してきた経 緯がある。

現在,波源モデルの制約のための明和大津 波の遡上高として用いられているのは,河名 (2000)が体系的にまとめたものである。河 名(2000)は,先島諸島全域で痕跡を調べ, 各地の明和大津波の遡上高の推定を行った。 さらに,Goto et al. (2010)は,河名(2000) の結果の見直しを行い,各村での遡上高を再 設定した。ただし,いずれの研究でも地形 図上の等高線から標高を読み取っていたた め,痕跡の標高を精度良く決定することがで きなかった。これは,高精度かつ迅速な測量 が困難だったためである。こうした問題を解 消するため,宮澤ら(2012)では,八重山諸 島を対象として,GPS 観測衛星を用いた精 密測量機器を使用し,77地点で痕跡の緯度・



図1 先島諸島全域における痕跡の位置とそ の標高(m)。標高は痕跡値を示して おり,遡上高を示しているわけではな い点に注意。 経度および絶対標高を求めている。宮澤ら (2012)が行ったような絶対座標・標高の決 定は、遡上高推定のために極めて有用である。

本研究では, 宮古諸島も含めた先島諸島全 域において, 現時点で得られているすべての 痕跡の測量を行い, さらに信頼度判定を行っ た上で各地の遡上高を再設定することを目的 とする。

## 2. 手法

#### 2.1. 測量方法

本研究では、八重山諸島の痕跡値について

は、宮澤ら(2012)のデータを引用する(た だし、誤記を修正)。一方、宮古諸島におい ては、既往研究で公開されている痕跡情報に 加え、我々の現地での聞き取り調査で新たに 得られた情報についても独自に測量を行った。 先島諸島全域の測量結果は表1と表2に示す とおりで、合計96点である。

測量には、MAGELLAN 社製の ProMark3
 および ProMark100 を用いた。これらは、
 GPS 衛星と電子基準点を相互参照すること
 により、任意の地点の緯度・経度および絶対
 標高を求めることができる(宮澤ら,2012)。
 解析データの標高は、東京湾平均海面(Tokyo)

諸島名	島名	地区名	ID	測量地点	緯度	経度	標高 (m)	古文書の記述または伝承	浸水の 有無	根拠	信頼度
		平良	M001	平良蔵元	24.80744	125.27970	5.7	蔵元の庭まで浸水した.40cm下で 測量.	有り	『御問合書』	А
		城辺字友利	M002	民家	24.72707	125.35937	18.1	明和津波襲来時、豚小屋に大きな 魚(鯛?)が打ち上がった.	有り	代々伝承(近 隣も認識)	A'
		城辺字友利	S004	友利元島遺跡	24.72544	125.35581	6.2 <sup>1)</sup>	津波堆積物が見つかった場所(友 利元島遺跡)	有り	宮古島市教育 委員会(2007)	Α"
	宮古島	城辺字砂川	S005	砂川元島	24.72349	125.35438	9.5	津波堆積物が見つかった場所(砂 川元島)	有り	宮古島市教育 委員会(2007)	Α"
		下地	a049	宮古島明和大津 波慰霊碑入口道 路上	24.74483	125.26030	2.4	海岸に流れ着いた死体を埋葬. 浸 水の有無は不明	不明	-	D
		下地	a050	宮古島明和大津 波慰霊碑直近の 海岸の砂丘上	24.74454	125.25963	6.4	現在は護岸がなされ,原地形かは 不明.	不明	-	D
宮古諸島	外胆白	平良池間	M003	池間村遠見番所	24.92164	125.24774	10.7	池間村遠見番所跡: 近隣には集落 跡.	無し	『御問合書』	А
	他间后	平良前里	a048	池間島前里村番 所跡	24.92297	125.24334	7.5	津波で被害あり.	有り	『御問合書』	А
	伊良部島	佐和田	S001	民家	24.84131	125.16277	6.9	津波が浸水したことを示す石が置 いてある.具体的にどこまで津波 が遡上してきたかは今では分から ない。	有り	伝承	C'
		佐和田	S002	民家	24.84100	125.16481	13.4	近くまで津波が遡上したため、目 印?として木を植えた家、屋号が 「松屋」であった為,植えた木は松 か?	無し	伝承	C'
		佐和田	a044	オコナー川(井 戸)	24.84190	125.16346	11.5	津波が付近まで遡上	有り	伝承	A'
		伊良部	a045	民家	24.81829	125.17742	7.5	直前まで遡上との伝承	有り	伝承	A'
		伊良部	a046	伊良部公民館井 戸の横	24.81812	125.17759	7.2	直前まで遡上との伝承	有り	伝承	A'
		仲筋	a036	ヌツタスキトゥ ンバラ	24.66842	124.70087	14.7	津川公民館横の岩	有り	伝承	A'
		仲筋	a037	竃の火が消えな かった家	24.66929	124.69998	14.7	浸水するも竃の火が消えなかった という伝承	有り	伝承	A'
	2 5 8 5	仲筋	a038	津川公民館井戸 の横	24.66823	124.70096	14.4	津波で埋没したという	有り	伝承	A'
	多民间岛	塩川	a040	浸水家屋	24.67126	124.70420	12.0	土台は道路上より-40cm.	有り	伝承	A'
		塩川	a041	浸水家屋	24.67038	124.70404	12.5	現在は誰も住んでいない	有り	伝承	A'
		塩川	a042	ヤティフトゥン バラ	24.66417	124.70851	12.8	妊婦が大岩に生えていた木に掴ま り助かる	有り	伝承	A'
		塩川	a043	多良間島前泊港 南の遺跡	24.67349	124.70555	8.6	約3500年前のもの,下田原型遺跡. 良好な保存状態	不明	-	D"
	水納島	水納	MN	明和大津波で打 ち上がったハマ サンゴ岩塊	24.75745	124.68803	9.4	年代測定の結果が明和大津波起源 を示唆	有り	加藤(2000),後 藤ら(2010)	A"

表1 宮古諸島での痕跡高(m),緯度経度,根拠と信頼度。

1) 測量地点の標高は7.4mであるが, 津波堆積層は, 1.2m下から検出されたため。

# 表2 八重山諸島での痕跡高(m),緯度経度,根拠と信頼度(信頼度以外は宮澤ら(2012)に基づく)。

諸島名	島名	地区名	ID	測量地点	緯度	経度	標高 (m)	古文書の記述または伝承	浸水の 右無	根拠	信頼度
			I001	長崎御嶽	24.34881	124.14786	3.6	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』	A
		新川	a007	マクタのティツキ	24.34741	124.15247	10.0	マクタのティツキヤー	無し(直前	牧野, 1981	A'
			1003	マーの東 キリックナーカー	24.34546	124.15669	11.5	の東 井戸の被害無し	まじ夜水)	『大波之時各村之形行書』	A
			1004	宮良家	24.34595	124.15712	13.4	宮良家がこの地点で助 かった	無し	伝承(牧野1968ほか)	С
			1005	宮鳥御嶽	24.34455	124.15795	10.6	被害無し	無し	『大波之時各村之形行書』ほか	A
			1006	釣川井戸	24.34385	124.15820	7.5	井戸の被害無し	無し	『大波之時各村之形行書』	A
			1007	桃林寺	24,34360	124,15568	5.0	引き崩された。	有り	「大波之時各村之形行書」	А
		石垣	1008	仲本家	24.34434	124.15828	11.6	道路から敷地内へ上が	有り	『大波之時各村之形行書』	A
			1052	壷方	24.35503	124.15466	9.2	被害無し	無し	『大波之時各村之形行書』	A
			a012	民家	24.34346	124.15902	8.5	玄関前の石段まで浸水	有り	伝承	A'
			2014	民家	24 34401	124 15824	8.9	階段前すで浸水	有り	伝承(牧野 1968)	Δ'
			0027	万垣村の畑	24.35254	124 15788	11.7	被宝毎1	毎1	『十波之時久村之形行書』	Λ.
		<u> </u>	1000	十四十百	24.33234	124.15700	0.0	秋日示し   サヨの始実無1	Amt. 1		A
			1009	ナカマヤー	24.34293	124.15999	16.8	津波到達せずという伝	無し	「入仮之時谷村之形1番』 伝承(牧野1968ほか)	B
		大川	1011	世持井戸	24 34436	124 16179	17.8	承かある 被害無1	<u> </u>	『大波之時各村之形行書』	А
			-012	上川の法山安良	24.24200	124.10175	2.0	法山	± h	「天夜に時間 10(9)	A!
			a015	入川の孤山豕座	24.34288	124.15950	3.8	加山	有り	位承(权野,1908)	A
			a025	エノーンオン	24.33927	124.15/81	2.6	(放告めり)	有り	収町(1981)	A
			I012	ソテツの木に絡み 助かる	24.34067	124.16371	11.1	女性の髪がソテツの木 に巻き付いて助かった	有り	代々伝承(牧野1968ほか)	Α'
			I013	美崎御嶽	24.33690	124.16038	4.5	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』	Α
			I014	天川御嶽	24.33600	124.16197	3.6	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』	A
		登野城	I015	糸数御嶽	24.33419	124.16515	3.7	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』	А
			a026	明和当時の八重山の蔵元跡	24.33835	124.15908	2.9	流出	有り	『大波之時各村之形行書』	А
			a028	石垣第二中学校北	24.34465	124.16940	20.8	津波に流された人が	無し	伝承	С
			I016	南風之井戸(パイ	24.33745	124.17636	12.9	井戸の被害無し	無し	『大波之時各村之形行書』	А
			1017	ノルノ	24.22408	124 17402	0.1	コン出とわた	<del>左</del> り	[+	
			1017	半侍杓 御月助	24.55498	124.17403	9.1	ケーさ 用 さ 4 し / こ	1月り (mt)	「人仮之時谷村之形打音」	A
			1018	于部御獄	24.34089	124.17632	21.2	律波到達せす	無し	大波之時谷村之形行書』はか	A
ス重山		平得	1019	新本开户	24.34172	124.17576	21.8	开戸の被害無し	無し	大波之時各村之形行書。	A
法自	石垣島		1020	波照間家	24.34006	124.17589	20.2	津波到達せず	無し	代々伝承	A
110 110			I051	紙屋橋	24.37906	124.18714	20.0	紙漉方があったが被害 無し	無し	『大波之時各村之形行書』	А
			1053	明和大津波後の平 得村番所跡	24.33858	124.17501	15.8	明和大津波後の平得村 番所跡:被害無し	無し	島袋(2004)	А
			I021	黒石御嶽	24.34713	124.19903	9.3	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』ほか	Α
		大浜	I022	フルスト原遺跡南 端	24.35046	124.19550	22.6	14~16世紀の石積みが 全く崩れていない	無し	本研究	В"
			a004	大浜中学校西の角 (墓地入口)	24.34649	124.19405	24.5	大浜村の番所移転先	無し	伝承	A'
			1023	外本御嶽	24.35203	124.22013	10.7	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』ほか	А
		信白	1042	小浜家の墓	24.35835	124.22334	33.2	小浜家の墓. 死者を浸 水域より高い地点に埋	無し	代々伝承	Α'
			1050	くみまんか(南風原	24 36475	124 21590	44 1	葬被害なし	<b>無</b> 1.	【大波之時各村之形行書】	А
			-002	井戸) 外本御嶽より北東へ	24.25282	124.221390	21.4	外本御嶽より北東へ約	4mt 1	「一次(版版10(0)まか)」	
		6K	a005	約130 mの段丘崖上	24.33282	124.22149	21.4	130mの段丘崖上 明和以前からた。たが		1公承(収到1908/ほル*)	C
			a005	宮良ウリカー(アダ ドゥーナー)	24.35190	124.22085	11.9	明和以前からめったが, いったん埋まって掘り 返した	有り	伝承(牧野(1981))	A'
			a015	タコラサー石	24.36501	124.22026	63.8	津波で生き残った宮良 村の人々が一時的に生 活した場所	無し	代々伝承(牧野1968ほか)	Α'
			1024	まじゃんがあ(真謝 井戸)	24.35465	124.24223	8.7	津波で埋没し,後に掘 り起こした	有り	牧野1968	А
			1025	民家(島仲家)	24.37118	124.23936	19.2	石垣の手前まで津波到 達	有り	代々伝承	A'
		1.15	1026	民家(福仲家)の墓 下	24.37132	124.23852	22.4	津波到達せず	無し	代々伝承	A'
		白保	1027	民家(福仲家)の墓	24.37125	124.23852	25.1	津波到達せず	無し	代々伝承	A'
			1029	手」「古	24.27047	124 22820	26.1	津波犠牲者を埋葬.戦	411 1	后承	
			1028	八塗	24.3/047	124.23839	20.1	前まで石碑もあった ご先祖が馬で逃げて大	無し	124.丹	A'
			I042-b	宮良家の墓跡	24.36810	124.23773	27.2	木にしがみつき助かった	有り	代々伝承	A'
		桃里	a019	ヨ時の秋里村番所  跡	24.42116	124.24721	34.9	ヨ 時 の 帆 里 村 番 所 跡. 被 害 無 し	無し	『大波之時各村之形行書』	A

表2 八重山諸島での狼跡局 (m),緯度経度,根拠と信頼度(信頼度以外は宮澤ら(2012)に基つ
--

諸島名	島名	地区名	ID	測量地点	緯度	経度	標高 (m)	古文書の記述または伝承	浸水の	根拠	信頼度
			1036	伊野田小学校裏	24.45325	124.24784	7.0	仲与銘村があった場所 と推定	有り	『大波之時各村之形行書』	A
		伊野田	a016	伊野田の「あまたり や潮荒」	24.46291	124.24866	7.3	明和大津波で動いたと の記録が残る大岩	有り	『奇妙変異記』	A"
		伊原間	1037	伊原間集落跡	24.51431	124.28252	29.3	旧伊原間集落跡:明和 大津波後,伊原間集落 が移転してきた場所	無し	『大波之時各村之形行書』	A
			a018	舟越の砂丘上	24.50573	124.28138	9.4	波が越えて行ったと考 えられる	有り	『大波之時各村之形行書』	A
			1033	安良村の井戸	24.56709	124.32763	9.7	被害なし	不明	『大波之時各村之形行書』	A
		安良	a017	安良の大底御嶽近 くの砂丘途中	24.56629	124.32853	5.8	引き崩された	有り	『大波之時各村之形行書』	А
		亚九星	I031	平久保の田んぼ	24.59334	124.31759	6.0	津波到達せず?海岸付 近の家15軒が被害	無し	『大波之時各村之形行書』	С
		TYM	1038	平久保砂丘	24.59237	124.31066	2.3	砂丘のトップ.波が越 えたか	有り	『大波之時各村之形行書』	A
	乙辰自	+15 Ver	1030	富野遺跡	24.45606	124.20028	4.4	富野遺跡:15-16世紀 の遺跡,明和大津波の 被害なし,	無し	本研究	D"
	石理島	仔毋	1040	米原	24.45403	124.18964	3.5	明和大津波当時の桴海 村.「磯辺所々,別状無 し」	無し	『大波之時各村之形行書』	A
		川平	1047	浦田原の田んぽ	24.44636	124.13359	1.6	川平村の田んぽが被害 を受けた	有り	『大波之時各村之形行書』	A
			1045	ザンドウ原第一、第 二貝塚	24.47068	124.12621	1.8	津波到達せず.	有り	本研究	A
			a001	仲間満慶の墓下(底 地)	24.46451	124.12263	6.2	被害なし	無し	本研究	В'
八重山		屋良部	1029	明和大津波後の屋 良部番所跡	24.42252	124.08217	6.9	被害なし	有り	『大波之時各村之形行書』	A
諸島			1048	シーラ原の田んぼ	24.41239	124.14469	2.8	名蔵村の田んぽがやら れた	有り	『大波之時各村之形行書』	A
		名蔵	a011	名蔵御嶽	24.39958	124.16184	14.3	1500年代には既に存在 し,被害を受けていな い	無し	『大波之時各村之形行書』	В'
			I043	旧冨崎村	24.36239	124.11633	1.7	津波遡上	有り	本研究	D"
		冨崎	1044	旧冨崎村近くの砂 丘上	24.36269	124.11710	3.2	遡上なし	無し	『大波之時各村之形行書』	A
		竹富	J005	花城井戸(ハナクン ガー)	24.33758	124.08978	4.7	被害無し	無し	『大波之時各村之形行書』	A'
		竹富	J006	美崎御嶽(ミシャシ オン)	24.33972	124.08730	3.9	明和大津波で拝殿は流 された	有り	『八重山のお嶽』牧野清著	A
竹	竹富島	竹富	J007	竹富島蔵元跡	24.32028	124.07765	4.2	1500年代に石垣島へ移 転しており、明和大津 波による被害無し	無し	本研究	В'
		竹富	J009	久間原御嶽(クマー ラオン)	24.32775	124.09174	16.0	明和以前からの石積み が背後に存在.明和大 津波の影響なし	無しまた は微小	本研究	В'
	黒島	黒島	a022	迎里御嶽直近の舗 装道路上	24.23455	123.99630	6.1	被害なし	無し	『大波之時各村之形行書』	A
		黒島	a023	南風保多御嶽	24.23118	123.99874	6.9	被害なし	無し	『大波之時各村之形行書』	A
	新作り	新城	a031	新城島上地の民家 の庭	24.23561	123.94150	3.4	新城島上地町内,大桝 家の庭	有り	『大波之時各村之形行書』	А
	初城市	新城	a032	タカニク遺跡(火番 盛)の下	24.23744	123.94326	11.0	火番盛以前の遺構が残 る遺跡	無し	本研究	В"
	西表島	南風見 仲	J004	仲間第一貝塚	24.28101	123.88133	4.8	被害無し	無し	本研究	D"
	波照間	波照間	J002	下田原	24.07033	123.77517	6.2	被害無し	無し	本研究	D"
	島	波照間	J003	シムスケー	24.06929	123.79154	18.7	被害無し	無し	伝承	A'

Peil: T.P.) を基準としている。なお,測量自体は数 cm の誤差で行うことができるが,測量地点の決定精度を考慮して,標高(m)の 有効数字は小数点以下1桁(2桁以下は四捨 五入)とした。

### 2.2. 信頼度判定

明和大津波の各地の遡上高を再評価するため,情報の根拠となる古文書や伝承などの信頼度を設定した。土木学会(2002)により, 1960年チリ津波以前の歴史津波記録については,4段階の信頼度(A~D)の分類基準 (表3)が設定されている。その中では,信

信頼度		判断基準	信頼度	伝承に関する追記	信頼度	考古学的,地質学的痕跡に関する追記
А	信頼度大なるもの	古文書・郷土史等に記載され, 痕 跡の場所を現在でも確認でき、し かも近年になって測量されて高 さの確定されたもの.	A'	複数の伝承が同一地域に残されて いる、または複数名が同一の伝承を 把握しており、かつ痕跡の場所を現 在でも確認でき、しかも近年になっ て測量されて高さの確認されたも の、		津波による痕跡だと判定する十分な 科学的根拠が存在し、かつ年代測定や 歴史史料などにより歴史津波と対比 が可能で、近年になって測量されて高 さの確認されたもの。
в	信頼度中なるもの	古文書・郷土史等に記載され, 痕 跡の場所を現在でも確認できる が, 近年の再測量のなされていな いもの.	В'	複数の伝承が同一地域に残されて いる、または複数名が同一伝承を把 握しており、かつ痕跡の場所を現在 でも確認できるが、近年の再測量の なされていないもの。	В"	律波以前から存在する遺跡などが良 好な状態で保存されており,律波被 害の有無を判断でき、しかも近年に なって測量されて高さの確認された もの.
С	信頼度小なるもの	古文書等に記載,或いは言い伝え られてはいるが,字名,集落名等 にとどまり,到達地点を確かめる ことのできないもの.	C'	左に同じ	C"	該当なし
D	参考値にとどまるもの	古文書等の関連現象・被災の記述 から推測されたもの.	D'	左に同じ	D"	被害の程度が推測の域を出ないもの.

表3 津波痕跡高の信頼度の分類(1960年チリ津波以前の津波を対象)。土木学会(2002)の判断基準に先島諸島の痕跡評価のための追記を加えたもの。

頼度を判定するための基準として、古文書や 郷土史での記載の有無や、痕跡の場所を現在 も確認可能かどうか、近代技術を用いた測量 の有無があげられている。ただし、土木学会 (2002)の分類基準に従うと、伝承に関する 信頼度が最高でもCとなってしまう。しかし, 先島諸島は小島群ということもあり、地元住 民間のつながりが非常に強い。また、多くの 住民は,明和大津波以後から現在に至るまで, 同じ土地に住み続けているという特徴があ る。そのため、津波被害について家族や近隣 住民によって代々語り継がれてきた伝承が数 多く存在しており、後述のようにその内容は 驚くほど具体的である。たとえば、津波後に 犠牲者を葬るために建立され、しかも現存し ている墓や, 生存者が摑まった木など, 場所 を特定できる上に、場合によっては古文書記 録よりも信憑性が高いと感じる事例が多々あ る。そこで本研究では、土木学会(2002)に よる4段階の信頼度の分類基準に、先島諸島 の実態に合うよう追記を加え、伝承について も正当な評価を行えるようにした(表3,信 頼度は $A' \sim D'$ で評価)。

また、考古学的、地質学的痕跡の取り扱いという、従来の信頼度の分類基準にはない情報も本研究に含まれる。例えば、放射 性炭素年代測定等により、明和大津波で打ち 上がったと推定される津波石や津波堆積物が 報告されている地点は、科学的根拠が十分で あると考えられる。また、1771年以前の遺 構は、明和大津波の被害を受けたかどうかの 判断材料として用いることができる(宮澤ら, 2012)。例えば、17世紀以前に作られた屋敷 囲い、特に、野面積みの石垣(切石ではなく、 石灰岩などを加工せずそのままの形で積んだ 石垣で,切石などに比べて脆い)があった場合、 津波が到達していたならば、こうした石垣は 容易に崩壊すると考えられる。そのため、こ のような場所では遡上がなかったか、もしく はあったとしても軽微なものだったと判断す ることができる。こうした実態を踏まえ、考 古学的、地質学的痕跡についても本研究で信 頼度の追記を行った(表3,信頼度はA"~D" で評価)。

古文書の中で評価が難しいものとして,井 戸の被害状況の記述がある。河名(2000)が 指摘しているように,古文書の井戸の記述の うち,被害がある場所は津波が遡上した地点 と判断できるが,「別条なし」との記述があ る井戸は,遡上がなかったのか,それとも津 波による浸水はあったものの,津波後にも利 用可能であったのかを判断することが難し い。したがって,「別条なし」と記述された 井戸については,場所も特定でき測量も行う ことができるため信頼度はAと判定されるが, 遡上高を推定する上では参考値に留めること とした。

#### 2.3. 遡上高の推定

上述の信頼度判定の結果をもとに、各地の

推定遡上高を再検討した。推定遡上高や浸水 域を設定するために用いるのは、第一に信頼 度が最も高い A- A"判定としたものである。 これらは、津波の被害の有無を明確に示すも のであり、浸水域に存在していたかどうかの 判定が容易である。また、B-B"やC-C" に関しても、周囲にその古文書記録や伝承な どを支持する情報が数多く存在しており、信 頼のおけるものであると判断される場合には、 遡上高の推定に用いた。

# 宮古諸島での測量結果および推定遡 上高

3.1. 宮古島(図2)

『御問合書』によると、「元島四か村(東 から順に、友利、砂川、新里、宮国)に人 家、屋敷囲いの石垣、樹木、土地までも、す べて波に引き流された」との記述があり、そ の遡上高は10.6 m と記述されている(河名、 2000)。また、以上の報告を受けた蔵元の役 人が元島四か村で現地見分をしており、ここ での犠牲者は宮古島全体の犠牲者の約8割 を占めるものの、元島四か村では耕地への 被害は少なかったと記録されている(島尻、 1988)。

このうち,痕跡を特定することができた のは友利地区である。同地区の民家(表1 のID:M002で標高18.1 m,以下同様にIDと 標高のみ記述する)に「津波が家まで到達 し,波が引いた後の家屋裏の豚小屋に大きな 魚が打ち上げられていた」という伝承が代々 伝えられている。さらに,周辺住民もこの伝 承を認識しており,近所では周知の事実であ る。この民家より標高が低い位置の民家で は,家が壊れたとの言い伝えもあり,信頼性 が高い。また,砂川元島遺跡(S005,9.5 m) での発掘調査の結果,明和大津波による砂質 津波堆積物が発見されている(例えば,久貝, 2011)。以上より,元島四か村での遡上高は, 9.5 m 以上かつ18.1 m 以下と推定される。

一方,『御問合書』によれば,西海岸に面 する平良地区では,「蔵元の庭まで潮が打ち あがった」という。蔵元跡地は,現在は民家 となっているが,民家から約0.4m下がった 階段の下で測量した結果(図3a),標高は5.7 mであった(M001)。上述の通り,古文書に 浸水の記載があることと,地方行政の中枢で あった蔵元という重要性から信頼度の高い情 報といえる。したがって,同地区での遡上高 は6.1m(=5.7m+0.4m)と推定される。

#### 3.2. 来間島

加藤(1989)によると、来間島では村が高 所にあったため村までの浸水は無かったもの の、南側の低地の畑は被害を受けたとの記述 が『御問合書』に記載されている。当時の村 の位置がわからないため痕跡情報は得られて いないが、少なくとも同島南部の一部が浸水



図 2 宮古島における痕跡値の位置と標高 (m)。



図3 (a)宮古島平良の蔵元跡地(M001),(b) 池間島の遠見番所(M003),(c)伊良 部島の民家(a045)。直前まで津波が 遡上したとの伝承がある。(d)多良間 島の妊婦が助かった大岩(a042)。

したと考えられる。一方,同島北部は崖になっ ており,最高点は46.9 m ある。したがって, 村が現在と同様に北部に面していたのであれ ば,村に津波被害がなかったことも理解できる。

3.3. 池間島(図4)

『御問合書』によると、池間村と前里村に は2丈5尺(=7.6m,河名,2000,注:本 稿では、清尺(1丈=3.2m)ではなく、和 尺(1丈=3.03m)を採用)の波が上がり、 前里村番所(a048, 7.5 m)の役人などは, 番所の後ろの崖に上がり難を逃れたが、池間 村番所にいた役人は走って逃げる際に波にの まれて溺死した人もあったと記されている。 砂川(1994)は、2つの番所の立地を考慮して、 『御問合書』に記されている前里村番所と池 間村番所をそれぞれ入れ替えた解釈をしてい る。ただし、津波は局所的に遡上高が高くな ることもあるため、一概に『御問合書』の元 の記載が間違っているとも言い切れない。い ずれにせよ、池間島南岸での遡上高は7.5 m 以上であり、池間村番所の後ろの崖(図3b, M003, 10.7 m)の高さは超えていないだろ うと考えられる。

#### 3.4. 伊良部島, 下地島(図5)

『球陽』によれば,伊良部,仲地,佐和田 の3集落に津波が来襲し,『御問合書』によ ればその高さは10.6mである(河名,2000)。 北西部の佐和田にある民家(S001,6.9m) では、津波が近くまで浸水したことを示した 石が置かれていたという。ただし、現存して いないため、津波が同位置まで到達したのか は定かではない。また、そこから南東にある 民家 (S002, 13.4 m) では, 近くまで津波が 溯上したことを後世に残すために、目印とし て木を植えた(木は現存しないが、沖縄では 珍しい「松木のマツ」という屋号であるため、 植えた木は松であったと考えられる)という 伝承が伝わっている。木は現在確認できない ため,正確な遡上高の推定は難しいが,最大 で13.4 m 弱の溯上があった可能性も否定で きない。さらに、古文書記録の遡上高とおお むね整合的であることを考慮すると,古文書 記録の遡上高(10.6 m)を採用しても大きな 誤差はないと考えられる。

一方,南西部にある複数の民家で,直前まで津波が遡上したとの伝承が残っている(中田,1990; Nakata and Kawana, 1995)。その標高はいずれも良く揃っており(図3c, a045, 7.5 m; a046, 7.2 m),信頼性が高いと言える。したがって,南西部の遡上高は7~8 mと推定される。

一方,下地島における遡上高は,『御問合書』には12~13丈(=36~39m)とある (加藤,1989)。ただし,島の最高点(21.7m) をはるかに上回るため,古文書記録の遡上高 の信憑性は低いと言える(河名,2000)。



図 4 池間島における痕跡値の位置と標高 (m)。



図 5 伊良部島における痕跡値の位置と標高 (m)。

#### 3.5. 多良間島(図6)

多良間島では,明和大津波によって被害 を受けた家屋のうち、3軒の位置を今でも特 定できる。そのうちの1軒は、浸水したも のの竃の火が消えなかったという伝承(a037, 14.7 m) が残っており、その他の2 軒 (a040、 12.0 m; a041, 12.5 m) も浸水被害を受けた と伝えられている(加藤・大山, 1987:中田, 1990;河名、2000)。また、現在の津川公民 館と多良間小学校の間の路上の,高さ約1.1 m, 直径 2.0 - 2.5 m, 周囲約 5 m の楕円形 の岩(ヌツタスキトゥンバラ, a036, 14.7 m) の上に登り助かった人がおり,津川公民館敷 地内の井戸 (a038, 14.4 m) は津波が流れ込 んだ(加藤・大山, 1987)。さらに、津波来 襲時に妊婦がヤティフトゥンバラの大岩(図 3d. a042, 12.8 m) に生えていたトウヅルモ ドキ(蔓性植物)に掴まり助かったという伝 承も残っている。多良間島の伝承は詳細かつ 場所を特定でき,その信頼性も古文書記録に 匹敵するほど高いといえる。そのため、多良 間島での遡上高は、ほぼ15mと考えてよい。 多良間島の標高の最高値は 34.2 m であるが, 島の大半は標高15m以下であり、同島の大 部分は津波により浸水した可能性が高い。そ の一方で, 犠牲者数が比較的少ないのは, 集 落が標高15m付近の高台に位置していたた めと考えられる。



図 6 多良間島における痕跡値の位置と標高 (m)。

#### 3.6. 水納島

水納島は起伏のない平坦な地形をしてお り、明和大津波によって水没したとされてい る(『御問合書』,加藤,1989)。現在得られ る情報として,内陸の標高 9.4 m の地点(MN, 9.4 m) に、年代測定の結果、明和大津波に よって海中から陸上に打ち上げられたことが わかっている約30トンの津波石(ハマサン ゴ岩塊)が存在している(加藤,2000;後藤ら, 2010)。集落は、島の中心からやや南東に位 置し,上述の津波石の標高よりも低い(地形 図判読によれば5m以下)。したがって、水 納島での遡上高は少なくとも 9.4 m あったと 推定される。ただし、9.4 m 地点まで巨大な 津波石を運んでいることから, 9.4 m を大き く上回る遡上高であった可能性が高い。島の 最高点の標高は13.2 m であるが、古文書に あるように, 島の大半が水没した可能性も+ 分考えられる。

#### 4. 八重山諸島での遡上高推定

八重山諸島での痕跡値は、宮澤ら(2012) に基づいている。表2には、宮澤ら(2012) が測量したすべての痕跡データに信頼度判定 の結果を加えたものを、そして、図7にはもっ とも痕跡値が多い石垣島のすべての測量デー タを示している。以下では、宮澤ら(2012) のうち、本研究で遡上高推定に用いた痕跡値 (下限と上限を与えるもの)のみを紹介する。

#### 4.1.四か村(新川,石垣,大川,登野城地区)

(1) 新川:『大波之時各村之形行書』(以下,形行書)などによれば,遡上高は2丈8尺(=8.2 m)である。この地区の長崎御嶽(I001,3.6 m)は,津波によって引き崩されている。一方,女性が「マクタのティッキャーの東」(a007,10.0 m)まで逃げてきて助かったとの伝承がある(牧野,1981)。したがって,新川地区での遡上高は3.6 m以上かつ10.0 m以下と推定される。



図7 石垣島における痕跡値の位置と標高(m),および死 亡率(%)。

- (2) 石垣:『形行書』などによれば、遡上 高は9.2 mである。同地区では、桃林 寺(I007, 5.0 m)および隣接する権現 堂は津波によって引き崩されたとある。 一方、被害がなかった宮鳥御嶽(I005, 10.6 m)および民家2軒(a012, 8.5 m; a014, 8.9 m)の標高は、8.5 m~10.6 mの範囲に収まる。以上より、石垣地 区の遡上高は、5.0 m以上かつ 8.5 m以 下と考えられる。
- (3) 大川:『形行書』などによれば, 遡上高 は約9.2 mである。古文書にある被害 状況としては,大川井戸(I009, 8.9 m) で被害が無かったとある。一方,民家 (a013, 5.8 m)が流出したとの伝承が ある(牧野, 1968)。大川井戸より高い 標高での家屋被害の記述がないことな どから,大川での遡上高は, 5.8 m 以 上かつ8.9 m 以下と考えられる。
- (4) 登野城:『形行書』などによれば, 遡上 高は12.2 m である。当地域の海岸沿い の美崎御嶽(I013, 4.5 m)は, 津波に よって引き崩されたとある。一方,民 家(I012, 11.1 m)では,女性の髪が ソテツに絡まり助かったという伝承が 残っている(牧野, 1981)。以上より, 登野城地区における遡上高は少なくと も4.5 m 以上で,実際は11.1 m を少し 上回る程度(女性が木に登った高さ分) と考えられる。

以上のように、四か村での遡上高の推定幅 (下限値と上限値の差)は、最大で約6mある。 このうち、下限値は主に家屋や御嶽が引き崩 されたとの情報に基づいている。津波による 建物被害は、建物の材質などにもよるが、一 般に2~3m以上の浸水深で大きな被害が発 生すると考えられる(Koshimura et al., 2009; 越村ら、2010)。当時と現在の家屋の構造は 異なるものの、こうしたことを考慮すると、 四か村では下限値よりも上限値により近い値 を遡上高として採用するべきだと考えられる。 その場合,四か村の推定遡上高は,古文書に 記載されている遡上高と整合的であることが わかる。古文書に書かれた四か村の遡上高が 正確だった理由として,河名(2000)は(1) 各浜から損所(被災地)までの距離の短さ,(2) 市街地のため道路が発達し見通しが良かった こと,(3)他地域と比較して強固な行政地域 であったことを挙げており,本研究結果も河 名(2000)の考察を支持するものである。

# 4.2.石垣島南部~東部の南岸(平得,真栄里, 大浜,宮良,白保地区)

- (1) 平得:『形行書』などによれば, 遡上 高は26.1 m である。同地区では,当時 の平得村番所が津波により引き崩され ている。島袋(2004)によれば,当時 の平得村番所は現在の八重山商工高校 のやや北に位置していたと考えられる (I017,9.1 m)。一方,宮澤ら(2012) によれば,現在の平得公民館(I053, 15.8 m)は津波後に移転してきた平得 村番所跡地に建設されたものであり, 浸水域外に位置していたと考えられる。 したがって,同地区での遡上高は9.1 m以上かつ15.8 m以下と推定される。
- (2) 真栄里:『形行書』などによれば、遡 上高は19.4 mである。しかし、真栄里 地区での明和大津波関連の情報を見つ けることができなかった。したがって、 河名(2000)と同様に、本研究では当 地区での推定遡上高の設定は行なわな い。
- (3) 大浜:『形行書』などによれば, 遡上高 は44.2 mである。黒石御嶽(I021,9.3 m) は津波により引き崩されている。一方, 大浜村番所の移転先跡地(現在の大浜 中学校付近, a004, 24.5 m)付近では, 津波遡上はなかったと考えられる。ま た, 14-16世紀のフルスト原遺跡(図)

8a, I022, 22.6 m)の石積みは,戦時中 に破壊されて戦後に復元されたもので あるが,戦時中に米軍が撮影した空中 写真に石垣が写っていること,壊され る前の石垣を実際に見た人々から聞き 取りできたことなどから,こうした情 報をもとに忠実に復元されている。つ まり,戦前は野面積みの石垣が損傷な く現存していたと考えられることから, 津波が浸水しなかったか,または浸水 しても軽微であったと判断できる。そ のため,大浜での遡上高は,9.3 m以 上かつ22.6 m以下だと考えられる。

- (4) 宮良: 『形行書』 などによれば, 遡上高 は85.4 mである。しかし,後藤ら(2012) が述べているように、実際の遡上高は 小浜家の墓(I042, 33.2 m)よりも低 いと判断できる。一方,外本御嶽の北 東約130mの地点(a003, 21.4m)で, ガジュマルの木にしがみつき助かった 者がいたとの伝承がある(牧野, 1981)。 この場所は正確にはわからないが、外 本御嶽の北東約130mの地点は、段丘 崖を超えた平坦な段丘面上に相当する (図 8b, 8c)。この段丘面の標高は大 きく違わないことを考慮すると, 測量 地点選定の不確定性による誤差は小さ いものと考えられる。したがって、宮 良地区での推定溯上高は21.4m以上か つ 33.2 m 以下であると推定される。
- (5) 白保:『形行書』などによれば, 遡上高 は 59.9 m である。この地区では,数多 くの伝承が残されているのが特徴であ る(宮澤ら,2012)。例えば,島仲家(I025, 19.2 m)では斜面下の石垣まで浸水し たという伝承があり,その斜面上部の 福仲家の墓(I027,25.1 m)は浸水域 の上に建てられている。そのほか,相 当数の犠牲者が打ち上げられた地点の 上部に千人墓(図 8d, I028,26.2 m) が建立されている。この墓は第2次世



図8 (a) 石垣島大浜のフルスト原遺跡 (I022), (b) 石 垣島宮良の段丘面 (a003) および (c) 段丘崖の下端, (d) 石垣島白保の千人墓跡地 (I028)。

界大戦の際に破壊されているが、墓跡 周辺からは人骨も採集されることから、 この伝承も信頼度が高いと言える。さ らに、我々が聞き取りを行った宮良家 の墓 (1042-b、27.2 m)は、先祖が木 にしがみついて助かった場所と伝えら れている。以上により、白保地区(千 人墓付近)での推定遡上高は、19.2 m 以上かつ25.1 m以下であり、その地点 よりやや南側で若干高くなる(27.2 m + $\alpha$ )ものと考えられる。

以上をまとめると、石垣島南部〜東部の東 海岸の痕跡値の特徴は、古文書記録に記述さ れた遡上高と大きな開きがある点である。し かも、その開きは海岸から損所までの距離が 長いほど、そして実際の遡上高が高いほど大 きくなる傾向にある。これは、河名(2000) や河名ら(2006)が述べているように、当時 の測量技術の問題が大きいと考えられる。そ のため、四か村のように古文書に記述された 遡上高をそのまま採用することはできず、本 研究で示したように、被害情報から痕跡高を 求め、遡上高推定には幅を持たせておくのが 適当だと考えられる。

# 4.3.石垣島東部~北部(桃里,伊野田, 伊原間,安良,平久保地区)

- (1) 桃里地区:『形行書』などでは、9.7 m の遡上があったとされている。同地区 での痕跡情報は少ないが、当時の桃里 村の番所(a019,34.9 m)は被害が無かっ たとされている。したがって、34.9 m 以下であったということはできるが、 下限を与えることは今のところ難し い。
- (2) 伊野田地区:『形行書』などには, 10.7

m程度の遡上があったとの記述がある。 伊野田地区には、津波当時は仲与銘村 があったが(河名,2000),この村は 跡形も無く破壊され、村倒れとなった とある。仲与銘村は、現在の伊野田小 学校運動場付近にあったとされ、古文 書の記述にしたがえば、その最奥部の 段丘手前付近(I036,7.0 m)まで遡上 した可能性が考えられる。仮に段丘崖 をある程度遡上したとすると、比較的 短距離で11 m地点に到達することから、 古文書にあるようにおよそ11 m程度 の遡上であった可能性も十分考えられ る。

その一方で、同じ地区では「あまた りや潮荒」(a016, 7.3 m) と呼ばれる 巨大な津波石が打ち上がったことが古 文書に記述されている(河名, 2000; Goto et al., 2010)。古文書に記された 海岸と岩塊の水平距離はかなり正確で あり、記述の信憑性も高いといえる。 Imamura et al. (2008) の数値計算結果 に基づけば,この石を現位置まで打ち 上げるには、およそ30mの遡上高が 必要となり,上述の古文書記録とは整 合しない。津口など、特殊なリーフ地 形の影響の可能性もあるが、この矛盾 を説明する材料を現時点では持ち合わ せていないため,伊野田地区での遡上 高は7m以上とし、上限は与えないこ ととした。

(3) 伊原間地区:『形行書』などによれば、 32.7 mの遡上があったとされている。 現在までに得られている情報としては、明和大津波後、伊原間の集落は浸水域より標高の高い場所(I037, 29.3 m) に村を移している(『形行書』)。また、 舟越では波が東海岸から内陸を通って 西海岸に抜けた可能性が指摘されている(牧野, 1981)。そのため、同地区 で最も標高が高い海岸近くの砂丘上 (a018, 9.4 m)を津波が越えたと推定 できる。したがって,伊原間での遡上 高は9.4 m以上かつ29.3 m以下と推定 される。

- (4) 安良地区:『形行書』などによれば、遡上高は「はちや野」というところで61.4 m、「はり石岳」で56.4 mとされる(河名,2000)。また、大城御嶽(a017,5.8 m)が引き崩されたとある。さらに、大城御嶽より斜面を上ったところに安良村の井戸(I033,9.7 m)があるが、井戸は別条なしとある。ただし、河名(2000)も指摘しているように、井戸は津波後に使用可能な状態であれば別条なしと記述された可能性もあり、浸水していないことを明確に示す痕跡とは言えない。したがって、現時点では遡上高は5.8 m以上とし、上限を与えないこととする。
- (5) 平久保: 『形行書』 などによれば, 海岸 付近の家15軒が被害を受け、田畑は 10町ほどの被害を受けている。田畑の 被害については, 各村について古文書 の中でも詳細に記述されている。これ は、 蔵元が被害にあい、 諸々の文書が 流失したこともあり,まずは村の状況 を把握する必要があったことと、村の 再建も早急に対応すべき課題であった ため, 農地被害の状況把握が重要だっ たためだと考えられる。つまり、津波 は平久保の海岸沿いの砂丘(I038, 2.3 m)を越え、平久保の田んぼのうち10 町に相当する範囲の最奥部(I031, 6.0 m)付近まで到達した可能性がある。 したがって, 遡上高は2.3 m以上かつ6.0 m以下と推定される。

石垣島東部〜北部の痕跡値の特徴は,古文 書記録や伝承から被害有無の判定が難しい点 である。特に,四か村とは異なり,伝承が少 ないのが特徴の一つと言える。 4.4. 石垣島西部(旧桴海村,川平地区, 底地地区)

- (1) 旧桴海村:1625年頃には存在していた 旧桴海村の田んぼでは,300坪の被害 が報告されている(『形行書』)。この田 んぼで,およそ300坪の範囲に相当す る最奥部(I039,2.4 m)での測量結果 から,推定遡上高は2.4 mであると考 えられる。
- (2) 川平:川平村の田んぼ(浦田原, I047, 最奥部で1.6 m)で、1町1反の範囲が 津波被害を受けている(『形行書』など)。 したがって、川平地区での推定遡上高 は1.6 m と考えられる。
- (3) 底地:古文書記録は同地については存 在しない。一方、15世紀に殺害され、 16世紀に入り建立された川平村の英雄、 仲間満慶の墓(a001, 6.2 m)が良好な 状態で残っていることから、津波遡上 高は6.2 mより低かったと推定される。

このように、石垣島西部では、記録は存在 するものの田畑での被害記述が中心である。 これは、人的、物的被害が軽微だったためと 考えられる。被害を受けた田畑の面積がわか り、かつ現在でもこうした場所の多くは田畑 として利用されている。しかも、平たんな場 所が多く、測量地点選定の不確定性による標 高の測量誤差がさほど大きくないと考えられ る。そのため、田畑のうち被害を受けた範囲 の最奥部で測量することで、最大遡上高を推 定することができる。その結果、いずれの地 域でもおおむね1~2m程度の遡上高と推定 され、石垣島南部~東部の遡上高に比べると 大幅に小さいことがわかる。

# 4.5石垣島中部~南部西側(屋良部崎,シー

- ラ, 冨崎地区)
- (1) 屋良部崎:津波後に移転した屋良部番 所跡(I029, 6.9 m)のみが痕跡情報 として得られている(『形行書』など)。

したがって,推定遡上高は最大でも 6.9 m と考えられる。

- (2) シーラ原:名蔵村の田んぼでも、田畑で7反の被害があったと報告されている(『形行書』など)。その最奥部の標高(I048, 2.8 m)から、遡上高は2.8 mと推定される。
- (3) 冨崎:旧冨崎村は、津波後に移住政策 によって村が建てられた場所であり、 被害の記述は見られない(『形行書』 など)が、冨崎野への遡上高は約9m と書かれている。しかしながら、被災 地域にすぐ村建てをするとは考えにく く、海岸に面した砂丘の頂点(I044,3.2 m)を津波が越えたとしても、旧冨崎 村(I043,1.7m)までは到達しなかっ たと考えられる。したがって、冨崎地 区での遡上高は3.2m程度と推定される。

このように、石垣島中部から南部西側にかけての遡上高はさほど高くないのが特徴である。 遡上高はおおむね2~3m程度となり、石垣島西部よりはやや高いものの、石垣島南部~東部~北部の遡上高に比べると大幅に小さい。

# 5. 八重山諸島の他の島々での遡上高 (竹富島, 黒島, 新城島(上地), 西表島, 波照間島)

(1)竹富島:北部の美崎御嶽(J006,3.9 m)は、 津波によって拝殿が流されたという伝 承がある(牧野、1990)。一方で、花城 井戸(J005,4.7 m)は、『形行書』など に「村や御嶽、井戸は別状なし」とあ ることから、花城井戸は被害を受けて いないと考えられる。さらに、竹富島 の蔵元跡(J007,4.2 m)は、津波前に は石垣島へ移転したものの、石積みが 現存しており、明和大津波による被害 はなかったと判断できる。したがって、 竹富島北部での遡上高は,3.9 m以上 かつ4.2 m以下だと推定される。

- (2) 黒島:『形行書』などでは,保里村の西 側が津波によって洗い流され,人家に 被害があったとされている。島の西海 岸には,迎里御嶽(a022,標高 6.1 m) と南風保御嶽(a023,7.0 m)がある。『形 行書』には,御嶽は別条なしとあるが, 番所が流失していることから,これら の御嶽は,浸水しても被害が出なかっ た可能性がある。一方,中田(1990) が指摘しているように,島で津波被害 を免れている人がいることを考えると, 島の最高点の標高(15.3 m)は超えて いないと考えられる。そのため,黒島 の西海岸沿いでの遡上高は,7.0 m以 上かつ15.3 m以下だと考えられる。
- (3) 新城島(上地):『形行書』などによる と,新城村(上地および下地)の死者 は205人であったが,全員が新城島内 で亡くなったわけではない。しかし, 畑や184軒もの家屋に被害があったこ とから,集落内(a031,3.5m)は大規 模に浸水した可能性が高い。一方,生 存者がいること,御嶽や井戸には別条 なしとあることから,少なくとも上地 での最高点である13.1mには達してい ないと判断できる。したがって,遡上 高は3.5m以上かつ13.1m以下と推定 される。
- (4) 西表島:『形行書』などによると,軽 微な被害にとどまっている。そのため, 被害を記述した古文書記録が乏しく, 遡上高の推定は難しい。ただし,仲間 村については村や御嶽・井戸は別状な いとされ,当時の村が南風見崎にあっ たと想定されながらも被害が磯辺とこ ろどころであったこと,仲間橋周辺に ついては,「奇妙変異記」に初めて宿道 や前の潟への影響が記されることなど

から,大きな被害はなかったと考えら れる。また,新城島に伝わる伝承では, 西表にぶつかった波が跳ね返ってきた という話が多い。これは,新城島西方 のリーフ形状と西表東海岸の潟が影響 している可能性が考えられるが,詳細 は不明である。

(5) 波照間島:『形行書』には,磯辺の所々での被害との記述がある。波照間島では作物の被害も報告されているが,場所を特定することができず,古文書記録に基づいて遡上高を推定するのは難しい。一方,下田原貝塚周辺(J002,6.2 m)は,発掘調査が複数回実施されているが,津波の痕跡は見つかっていない。また,シムスケーと呼ばれる井戸(J003,18.7 m)があるが,被害を受けた記述がない。したがって,波照間島北岸での遡上高は6.2 mに達していなかった可能性が高い。

石垣島以外の八重山諸島の島々の特徴は, 古文書記録は比較的充実しているものの,御 縁や井戸などの具体名が記されていない場合 がある点である。それでも,竹富島北部につ いては,精度よく遡上高を推定することが可 能であった。黒島や新城島(上地)については, 推定精度は高くないものの,波源モデルの制 約条件としては利用可能だと考えられる。一 方,西表島や波照間島では古文書記録に詳細 がなく,考古遺跡の保存状態が今のところ唯 一の判断材料となる。こうした地域では,砂 質の津波堆積物調査を今後行って,遡上高を 再検討することが望ましいと考えられる。

#### 6. 従来の推定値との比較

本研究では、96 地点での測量結果に基づ いて、29 地域で遡上高の推定を行った。こ れは、河名(2000)やGoto et al.(2010)で 推定された遡上高(16~18箇所)を大幅に 上回っている(図9)。こうした測量の結果



図 9 (a) 古文書記録, (b) 河名 (2000), (c) Goto et al. (2010), および (d) 本研究に基づく遡上高の推定結果 (m)。(d) の自丸は, 波源モデル評価用の推定遡上高を示す。

明らかになったこととして、宮古諸島での遡 上高が従来想定されていたよりも高かった可 能性があるということである。たとえば、宮 古島友利では、最大18m程度遡上した可能 性がある。この値は地形効果による局所的な ものである可能性もあるが、宮古島南岸で 10 m は超えていたものと考えられる。また, 伊良部島でも、南部で7m程度,北部では最 大13mに達するような遡上があった可能性 がある。そして、池間島でも 8~11 m, 水納 島でも10m前後だったと推定され、従来知 られていた多良間島の15mの遡上高とあわ せて考えても,軒並み10mを超えるような 遡上高となっていることがわかる。こうした 特徴は、従来の波源モデル(Nakamura, 2009; Miyazawa et al., 2012) ではまだ説明ができず, 宮古諸島により大きな津波が来襲する波源モ デルを再検討する必要がある。

一方,八重山諸島においては,石垣島南

~東海岸での遡上高は従来の推定結果(河 名,2000;Goto et al.,2010)に近いものであ る。そして,明和大津波の最大遡上高は,宮 良周辺で最大33m(33mまで遡上したかは わからないものの,現存する遺構から,それ 以上遡上したことを示す証拠がない)と判断 される点も,先行研究と整合的である。一方, 本研究での大きな成果は,石垣島の北~西側 での遡上高推定を行うことができた点にある。 その結果,遡上高は概ね3m未満と推定され る。一般には,最大遡上高が大きく注目され るが,波源モデルの推定を行う上では,低い 遡上高の情報も極めて重要な制約条件となる。

#### 7. 波源モデル推定のための遡上高再設定

古文書記録から推定された遡上高を制約条件として、津波数値計算を行って波源モデル を評価する場合、Aida (1978)のように痕跡 値との合致の程度を定量的に評価する必要が ある。その場合,上述のように幅を持たせた 推定値では,計算値との直接的な比較が難し いという問題がある。また,遡上高の上限と 下限が得られている場合,その中央値と計算 値を比較すればよいというわけでもなく,上 限値または下限値のどちらかにより近いと考 えられる場合もある。さらに,推定幅(上限 と下限の差)が大きい場合には定量的な比較 には用いず,その幅の中に計算値が収まって いるかという判断材料とするのが妥当だと言 える。

波源モデルの検討にあたって,推定した遡 上高にはいくつかの利用法があると考えられ る。例えば,明和大津波の波源そのものを推 定しようと思った場合,各地で幅のある遡上 高の中でも信憑性の高い値を採用し,定量的 評価を行う必要がある。一方,明和大津波を 想定したハザードマップを作成する場合,よ り危険な条件を想定して評価しようと思うと, 全地点において最大値を採用するという利用 法も考えられる。本章では,前者について, 痕跡値と計算値を比較しやすいよう,さらに 考察を深める。

遡上高の推定精度が比較的高い地点(主観 的ではあるが、ここでは上限と下限が約5m 以内の範囲で与えられている地点とする)に ついては、遡上高を絞り込んで一意に与えた。 これは、現在津波数値計算で用いられている 理論や地形データの精度や、先島諸島のよう に複雑なリーフ地形を遡上するという特徴を 考えれば、古文書から推定される遡上高と計 算値を合わせようと思っても,数m程度の 誤差は容易に発生してしまうと考えられるた めである。また、家屋被害がある地点が下限 値として与えられている場合,家屋被害が 発生するには数 m の浸水深がその地点で必 要だと考えられることから(Koshimura et al., 2009; 越村ら, 2010), 下限値よりもより上限 値に近い値を採用することとした。その一方 で、推定精度が低い地点(上限もしくは下限 のどちらか一方しか情報がない地点や両者の 開きが5m以上ある場合)については、推定

幅の範囲に計算値が収まっているかという定 性的な比較に留めることとした。

波源モデルの定量的評価用の遡上高の推定 結果を,理由とともに表4に示し、さらに図 9d に白丸でプロットした。なお、ここで行 う遡上高の推定精度を考えると、小数点以下 にはほとんど意味がないため、四捨五入して いる。波源モデルの妥当性の定量的検討に用 いることができると判断されるデータは16 点,定性的検討に用いることができる点は 13 点である。これは、Nakamura (2009) が 波源モデルの定量的検討に用いた9点, Miyazawa et al. (2012) の 15 点と比較しても増 加しており, さらに精度が向上している。た だし、ここで示したのはあくまで波源モデル 検討用の遡上高であり,一部は5章までの客 観的証拠に基づく測量結果に著者らの現時点 での解釈を加えたものである。そのため、将 来的に新たな情報が追加された場合,5章ま での遡上高の推定幅の中で変動しうる可能性 がある点に注意する必要がある。

謝辞:本研究は,河名俊男氏,須田陽介氏, 池間仁子氏の協力を得た。ここに記して謝意 を表する。なお,本研究は,科学研究費補助 金(基盤 A, 22241042)を用いて行われた。

#### 引用文献

- Aida, I. : Reliability of a tsunami source model derived from fault parameters. Journal of Physics of the Earth, 26, 57–73,1978.
- 土木学会(原子力土木委員会津波評価部会): 原子力発電所の津波評価技術,321p.,土木 学会,2002.
- Goto, K., T. Kawana, F. Imamura: Historical and geological evidences of boulders deposited by tsunamis, southern Ryukyu Islands, Japan. Earth–Science Reviews, 102, 77–99, 2010.
- 後藤和久,島袋永夫,島袋綾野,正木譲,宮 城邦昌,宮澤啓太郎,再考・1771年明和 大津波の遡上高I-85m 遡上説の矛盾と

	表 4	痕跡値をも	とに推定	した各地で	の波源推定	用遡上高。
--	-----	-------	------	-------	-------	-------

				推定遡上高	5 (m)		波源推定用遡上高(m)			
諸島名	島名	地区名	古文書の 遡上高 (m)	河名 (2000)	Goto et al. (2010)	本研究	遡上高(定 量評価用)	遡上高(定 性評価用)	理由	
		友利	10.6	10~11	10	9.5~18.1	-	9.5~18	推定精度の幅が大きく,一意に決めることが難しい ため	
	宮古島	平得	なし	なし	なし	6.1	6		島の中枢であった蔵元の被害情報であり,信頼度が 高い	
	来間島	-	なし	なし	なし	なし	-	-	痕跡情報が存在しないこと	
	池間島	南部	7.6         なし         7~8         7.5~10.7         10         -         7.5m地点で番所が被害を受け と判断.				7.5m地点で番所が被害を受け,浸水深が数mあったと判断.			
宮古諸島	伊良部島	北部	10.6	10~11	10~11	<13.4	11	-	痕跡値と古文書記録が整合的なため古文書を採用	
	伊良部島	南部	なし	6~7.5	なし	7~8	7	-	7.2m地点の家屋の直前まで津波が来たものの浸水 していないため	
	多良間島	-	なし	15	15	15	15	-	15m前後の浸水を示す痕跡情報が複数あるため	
	水納島	-	なし	なし	なし	>9.4	-	>9.4	津波石の堆積している標高で制約されており,打ち 上げにはそれより水位が高くなければならないた め	
		新川	8.2	8.2	8	3.6~10	8	-	痕跡値と古文書記録が整合的なため古文書を採用	
		石垣	9.2	9.2	9	5~8.5	9	-	痕跡値と古文書記録が整合的なため古文書を採用	
		大川	9	9	9	5.8~17.1	9	-	痕跡値と古文書記録が整合的なため古文書を採用	
		登野城	12.2	12.2	12	$11.1 + \alpha$	12	-	痕跡値と古文書記録が整合的なため古文書を採用	
		平得	26.1	18~19	12	9.1~15.8	-	9.1~15.8	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
		真栄里	19.4	なし	12	なし	-	-	痕跡情報が存在しないこと	
		大浜	44.2	30-35	22	9.3-22.6	-	9.3~22.6	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
	石垣島	宮良	85.4	35	22-32	21.4~33.2	-	21.4~33.2	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
		白保	59.9	30-35	25	19.2~25.1	22	-	被害を受けた民家と浸水域より高い位置に建立さ れた墓の標高の中間値	
		桃里	9.7	10	10	<34.9		<34.9	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
		伊野田	10.7	20-25 <sup>1)</sup>	11	>7		>7	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
八重山諸島		伊原間	32.7	32.7	なし	$9.4 \sim \! 29.3$	-	9.4~29.3	推定精度の幅が大きく, 一意に決めることが難しい ため	
		安良	56.4~61.4	30 <sup>1)</sup>	15-20	>5.8	-	>5.8	痕跡情報が少ないため	
		平久保	なし	なし	なし	2.3~6.0	6	-	2.3mの砂丘を超えて家屋被害を出すだけの浸水深 があったと考えられる	
		旧桴海村	なし	なし	なし	2.4	2	-	周囲の標高に大差がなく,浸水範囲の田んぼが背後 の崖より手前の低平地であるため	
		川平	なし	なし	なし	1.6	2	-	周囲の標高に大差がなく,浸水範囲の田んぼが背後 の崖より手前の低平地であるため	
		底地	なし	なし	なし	<6.2	-	<6.2	痕跡情報が少ないため	
		屋良部崎	なし	なし	なし	>6.9	-	>6.9	痕跡情報が少ないため	
		シーラ	なし	なし	なし	2.8	3	-	周囲の標高に大差がないため	
		富崎	なし	なし	なし	1.8~3.2	3	-	上限値,下限値に大差がないため	
	竹富島	北岸	なし	なし	なし	3.9~4.2	4	-	上限値,下限値に大差がないため	
	黒島	西岸	なし	5	なし	7~15.3	-	7~15.3	推定精度の幅が大きく、一意に決めることが難しい ため	
	新城島(上 地)	-	なし	なし	なし	3.5~13.1	-	3.5~13.1	推定精度の幅が大きく,一意に決めることが難しい ため	
	西表島	大原	なし	数m	なし	なし	-	設定せず	痕跡情報が少ないため	
1	波照間島	-	なし	3.5-520	なし	なし	- 1	<ul> <li>設定せず</li> </ul>	痕跡情報が少ないため	

1) 測量地点の標高は7.4mであるが, 津波堆積層は, 1.2m下から検出されたため。

- 問題点一. 津波工学研究報告, 第 29 号, 121-127, 2012.
- 久貝弥嗣,友利元島・砂川元島で確認された 有孔虫堆積層.宮古島市総合博物館紀要,
  - 15, 65-75, 2011.
- 石垣市総務部市史編集室:石垣市史叢書 12, 120p, 1998.
- 岩崎卓爾:大波の時各村之形行書,気象雑纂, 3,1-57,1927.
- 日吉善久・安藤雅孝・木村政昭:1771年南 西諸島明和の大津波の発生機構-巨大海底 地辷りの発生-・地震学会講演予稿集,2, 80-80,1986.
- 今村明恒:琉球地震帯並びに明和大津波について.地震,10,431-450,1931.
- 今村文彦・吉田功・アンドリュームーア:沖 縄県石垣島における1771年明和大津波と 津波石移動の数値解析・海岸工学論文集,

48, 346-350, 2001.

- Imamura, F., Goto, K., Ohkubo, S., A numerical model for the transport of a boulder by tsunami. Journal of Geophysical Research -Ocean. 113, C01008, doi:10.1029/2007JC004170, 2008.
- 加藤祐三・大山春翠,琉球列島多良間島での 八重山地震津波Ⅱ.サンゴ礁岩塊から推定 した津波の挙動と伝承との対比.琉球大学 理学部紀要,45,245-252,1987.
- 加藤祐三,新発見史料『御問合書』にみる宮 古群島での八重山地震津波,琉球大学理学 部紀要,47,153-158,1989
- 加藤祐三,琉球列島宮古水納島の津波石.歴 史地震,第16巻, p. 203-205, 2000,
- 河名俊男・中田高:サンゴ質津波堆積物の年 代からみた琉球列島南部周辺海域におけ る後期完新世の津波発生時期,地学雑誌, 103,352-376,1994.
- 河名俊男:沖縄における津波被害の検証-1771年明和津波を中心に-、「亜熱帯研究 の総合的推進のための研究可能性の調査: 沖縄における自然災害リスクとその対応力 に関する基礎調査,亜熱帯総合研究所編亜 熱帯総合研究所編,第五章,2000.
- 河名俊男・島袋永夫・中田高・正木譲・島袋 綾野:石垣島南部(四箇・平得・真栄里・ 大浜)における1771年明和津波の遡上高 ~とくに戸高に関連して~.歴史地震,21, 246,2006.
- Koshimura,S., T. Oie, H. Yanagisawa, and F. Imamura : Developing Fragility Functions for Tsunami Damage Estimation Using Numerical Model and Post-Tsunami Data From Banda Aceh, Indonesia, Coastal Engineering Journal, 51,243–273,2009.
- 越村俊一・萱場真太郎, 1993 年北海道南西 沖地震津波の家屋被害の再考-津波被害関 数の構築に向けて-,日本地震工学会論文 集,10,87-101,2010.
- 牧野清:八重山の明和大津波,城野印刷, 447p, 1968.

- 牧野清:改訂増補 八重山の明和大津波,城 野印刷,462p,1981.
- 牧野清:八重山のお嶽, 106-115, 1990.
- 宮澤啓太郎・島袋永夫・島袋綾野・正木譲・ 宮城邦昌・後藤和久:八重山諸島における 1771年明和大津波の痕跡高調査における 考古遺跡の重要性. 南島考古, 31, 1-12, 2012.
- Miyazawa, K., K. Goto, F. Imamura: Re-evaluation of the 1771 Meiwa Tsunami source model, southern Ryukyu Islands, Japan. In: Yamada, Y.; Kawamura, K.; Ikehara, K.; Ogawa, Y.; Urgeles, R.; Mosher, D.; Chaytor, J.; Strasser, M. (Eds.), Advances in Natural and Technological Hazards Research, Submarine Mass Movements and Their Consequences, Springer, Vol. 31, 497–506, 2012.
- Nakamura, M. : Fault model of the 1771 Yaeyama earthquake along the Ryukyu Trench estimated from the devastating tsunami. Geophysical Research Letters, 36, L19307, 2009.
- Nakata, T., Kawana, T., Historical and prehistorical large tsunamis in the southern Ryukyus, Japan. In Y. Tsuchiya, N. Shuto (Editors) Tsunami: Progress in Prediction, Disaster Prevention and Warning, Kluwer Academic Publishers, Netherlands, pp. 211–222, 1995.
- 島尻勝太:「四、(4)御問合書」『平良市史』, 平良市教育委員会, 808-812, 1988.
- 島袋永夫:八重山毎日新聞3月12日号, 1982.
- 島袋永夫: V. 検証・明和大津波による平得 村・真栄里村の被災状況,『村むら探訪― 平得村・真栄里村の移り変わり―』,石垣 市史巡検,8,74-75,2004.
- 島袋永夫:明和大津波時の測量方法-戸高と は戸板高のことである-.明和の大津波を 語る会発表資料,2008年2月2日,2008.
- 砂川玄正,近世時代後期における宮古の自 然災害.平良市総合博物館紀要,1,1-53, 1994.